
JAIL HOUSE COOK

酔眠隼丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

J A I L H O U S E C O O K

【Nコード】

N 6 7 6 4 C

【作者名】

酔眠隼丸

【あらすじ】

エルヴィス・プレスリーの“Jailhouse Rock”を聞いてて思いつきました。内容は『刑務所の中で料理人として働く男』の話です。いきなりの思いつきですが何とか執筆を続けていこうと思っています（笑）

『0』 プロローグ

普通の、平凡な会社のオフィスに怒鳴り声が響いた。

「何でこんな単純なミスするんだよッ！」

「はあ、すみません・・・」

「どうやら普通の、平凡な会社員、ヤマダノリユキ山田紀幸くが怒られているようだ。」

紀幸は“この会社”に勤めるサラリーマンである。中肉中背よりやや痩せ気味、手先は器用で料理が得意という事以外はこれといった特徴のない、まさに『吉良吉影』の様な男だ。

「すみませんじゃないよッ！お前このミス何個目だと思ってるんだッ！？」

「えつと、42個目ですね・・・」

とにかく紀幸はミスが多い。なぜか？“この会社”が彼に向いてないからである。

「42個目ですね、じゃないよッ！たく、もうお前明日から来なくていいからなッ！」

「はあ・・・」

・・・次の日、あっさりと会社をクビになった紀幸は自宅で求人雑誌を読んでいた。

「あーあ、流石に7回も会社クビになると精神的にまいってくるわな。どっかに俺に向いてる職業でもないかねえ・・・？」

と、紀幸の目はページの隅っこに小さく書かれた文字を見つけた。

ジェイルハウスコック
“ 刑務所料理人募集中、 志願者は 事務所まで ”

「・・・！？これだッ！！」

そう叫ぶと紀幸は一目散に指定の事務所まで駆けて行った。

『0』 プロローグ（後書き）

どうでしたか？

感想、意見、指摘など、何でもお待ちしております。

『1』準備（前書き）

ペンネーム変更混乱した方、申し訳ありません。
気分転換に変えてみました（笑

『1』準備

「・・・それで料理は得意だから申し込もうとしたわけですね？」

「ええ、そうです。」

「じゃこの書類に必須事項を記入して、簡単な質問に2、3答えて頂けますか。」

「あ、はい。」

早速面接に来た紀幸は、書類を見て不思議に思った。

（何か簡単すぎねえか・・・？）

「書き終わりましたか？それじゃあ最後にここにサインをお願いします。印鑑でも結構ですんで。」

紀幸は言われるがままに書類に記入し、サインをして完成させた。

「それじゃあ以上で終わりです。今日は金曜日なんで・・・来週の火曜日までにこれをそろえておいて下さい。」

そう言う面接官は一枚の紙を取り出し、紀幸に渡した。

「え、もう終わりですか？」

「はい。万点中満点、合格です。」

そっくり残して面接官は部屋を出て行った。

「おいおい、いいのか？こんなんで・・・ってマジかよ!？」

紀幸は今さっき手渡された紙に目をやって驚いた。そこには

“勤務に必要な道具・その他、以下各自でそろえること”

と書かれていて、そのあとに続いて聞いた事のないようなものまでビッシリと書き込まれていた。

「後二日でこれ全部そろえんの・・・？冗談キツイぜ・・・」

とりあえず紀幸は近所の雑貨屋へと走った。

「あとは・・・サバイバルナイフう？これは文化包丁でいいや。」
紀幸は多大なる努力により、“必要な物リスト”の半分近くが手に入っていた。

・・・と言っても日本国内でてに入るものに限ってだが。

「ったく、こんなの何に使うんだよ・・・」

そう、“必要な物リスト”の残り半分は到底日本国内じゃ手に入りそうにないものばかりであった。

「ふうゝ、ま、足りないもんは代用すりゃいいか。」

紀幸はこのときにはまだこれから起こる事の重大さを、微塵も考え
てはいなかった・・・

『1』準備（後書き）

どうでしたか？

次回から本格的に物語りに入っていく予定です。

『2』囚人はスタンド使い

申し込んでるやつは、俺のほかにもいた。

「えー、みなさんお集まりですか？」

黒いスーツを着た男が口を開いた。結局“必要な物リスト”が全部そろわないまま約束の日になっていた。

「それではみなさんの仕事内容を簡単に説明させていただきます。まずは刑務所の設備、特色などから。」

紀幸は集まった人々と一列に並んで話を聞いていた。

「みなさまに勤務して頂く刑務所はこの島全体を丸々改造して作られたものであり、脱走は不可能です。」

黒いスーツの男は大きく広げた地図の一角を指して話している。

「えー、しかしながらですね、いや、安全な事には変わりはないんですが、収容されている囚人達はみな様々な“特技”と言いますか、とにかく“特異”なものばかりでして。」

一呼吸おいて、

「“超能力”のようなものを持つものばかりです。」

集まった人々は互いに顔を見合わせている。誰かが、

「で、その超能力^{スタンド}つてのはどんなんだい？」

と質問した。

「私の知る限りでは、どんな傷を負っても平気だったり、他人と意識だけを瞬時に入れ替えたりできるものがあります。」

「なんだ、再生能力や意識^{ウルヴァリン}変換^{ギニョー}が収容されてんのか。」

「簡単に言つとそういうことです。もし仮にこの話を聞いて職務をまっとうする気が萎えた方はどうぞ、今のうちにお引取り下さい。」

初めのうちはみな動かなかったが、“バカバカしい”と1人、また1人と帰っていく者が出てきた。

「それでは次に特色を・・・」

と黒いスーツの男が話し始めたときには、最初の人数の半分以下になっていた。

「・・・以上で説明を終わります。何か質問のある方は？」

黒いスーツの男の話をまとめると、

・ 刑務所の中の囚人は全員“超能力者”である。
・ 紀幸達の仕事は“ただ料理を作り、食わせる”だけ。
という非常にシンプルなものだったが、3時間近く話していた。黒いスーツの男の話スピードが遅かったわけではない。実際に“超能力者”の資料や映像を見ていたからである。そのため、ここに残った者のほとんどがその存在を信じていた。

「それでは今現在8人の方が残っていますので、3人、3人、2人のグループに分かれてください。」

どうやら島に向かうための船は“職務をまっとうする気が萎えた方”が帰って行くにつれて、俺の仕事はもう終わった、と言わんばかりに引き返していったようである。そのため現在残っている船は、

職員用が1台と、3人乗りの船が3台という状況であった。

「それではこのこと、ここで分かれてください。」

紀幸は3人グループだった。

「同じグループだね、よろしく。」

お、この娘胸デケじゃん。

「お、おう。よろしく。」

さて、もう1人は・・・？

「・・・よろしく。」

男だった。それもかなり大柄な。

「う、うん。よろしく・・・」

紀幸はちよつとブルーになりながら船へと乗り込んでいった。

『2』囚人はスタンド使い（後書き）

んー、書いてて思いましたが、まだ本編に入った感じがしませんね。
もう少しかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6764c/>

JAIL HOUSE COOK

2011年1月9日02時49分発行